

鋼鉄の極緑神

ルフト

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

突如として帝国を裏切った超兵器。帝国はそれを撃滅するべく、戦いを仕掛ける。

が、その途中で空間に穴が開き、全ての超兵器と、帝国艦隊を吸い込んだ。そして異世界にとばされ、見知らぬ世界で過ごしていく、そんな物語

# 目次

第一話	始まり	1
キャラクター設定		5
第二話	運命の舵輪は廻る	9
第三話	蒼穹の暴風	12
第五話	偽りの暴風	14

## 第一話 始まり

### 第1話 始まり

1939年3月25日、この年この日は世界規模のクーデターが発生した年である。

このクーデターの発端はアジア極東小国家ウイルキアで起こった反乱が原因だった。

この反乱を起こした首謀者のヴァイセンベルガー将軍はウイルキア制圧後

世界への侵略を宣言した。

だが、アメリカなどの大国はウイルキアの解放軍である近衛艦隊と同盟を結び

帝国から世界の国々を解放するため解放軍は戦いへと突入した。

数か月後ウイルキア

「なに、またやられたのか！」

「はい、味方の偵察機が確認したところ、全滅した模様です。」

ウイルキア帝国の戦況は初めは良かったものの、徐々に悪くなっていった。

「ち、解放軍の奴らめことごとく邪魔をしおって。こうなったら超兵器を向かわせろ。」

超兵器は通常兵器とかけ離れた性能をもつ兵器で、とても巨大である。

「そ、それが、問題が発生しまして。」

「なんだ、早く言え。」

ヴァイセンベルガーは自分の艦隊が次々に沈んでいくので焦りが増していった。

その焦りも次の通信兵の言葉を聞いたとき頂点に達した。

「そ、それが、い、一部の超兵器が裏切りました。」

”超兵器の裏切り”これは帝国にとって最大の損害であり、最大の脅威であった。

「馬鹿な!?!ありえん。」

と、そこに一人の兵が入ってきた。その男は味方の偵察機から入った情報を伝えに来たようだ。

が、その男はかなり焦っているようだった。

「た、大変です！」

「今度はなんだ！」

「さきほど通信がありました。それによると、我が全艦隊が裏切った超兵器により全滅させられました。」

「なん・・・だと・・・」

この知らせはウィルキア帝国滅亡一步手前を示していた。

「クソオー!!残っている超兵器を全て向かわせろ、我もリヴァイアサンの出撃する。」

ヴァイセンベルガーの考えは裏切った超兵器を帝国に残っている超兵器で撃滅しようというものだった。

だがこの考えが後に自分たちに起こる出来事の原因になるとは誰も知らない。

## 太平洋とある艦隊

『ウィルキア帝国といってもしよせんザコにすぎんな。』

『同感だ。』

『でもよく少し前までウィルキアにいたと考えると、自分が馬鹿らしく思えてくるよな。』

『同感だ。』

『お前はそれしか言わないよな、グロースシュトラールさん?』

『黙れスピード狂が。』

『俺はヴィルベルヴィントだ。』

『そうだったな、スピード狂。』

『だから、おれはヴィルヴ』うるさいぞ、少しは黙ってろ。』へーい。』  
海の上で行っていたのは、超兵器たちの会話だった。

『こちら究極ドリル戦艦アラキだ。全艦の状況を伝えろ。』

『こちらヴィルベルヴィント。俺とグロースシュトラールは異常なし

だ。』

『こちらナハト。右舷に主砲弾三発被弾したが、航行とともに戦闘に支障なし。』

『こちらヘイム。俺とドレットは異常なしだ。』

『こちらアルス。異常なし。』

超兵器達は、先程の戦闘で損傷箇所を、旗艦に報告しているところだった。

『よし、このまま航海を続ける。』

全員の報告が終わり、再び航海に戻っていった。

それから30分後、

『偵察機より入電、五百キロ先にて帝国艦隊。』

『よし、帝国艦隊殲滅のため、これより我々は帝国艦隊に打って出る。全艦、全速前進。』

「「「了解」」」

一方こちらは

「おい、まだ見つからんのかリヴァイアサン。」

ヴァイセンベルガーは裏切った超兵器を発見出来ず苛立っていた。

「はい、まだ見つかってませんが……?!、レーダーにノイズ、恐らく敵の超兵器です。」

「よし、全艦に通達、第一種戦闘配置、撃滅に向かう。」

アラキ一行

『帝国発見。』

『よし、全艦第一種戦闘配置。砲撃始め!』

その瞬間、全ての超兵器が轟音とともに、戦闘を開始した。

『ヴォルケンクラッツァーより高エネルギー反応。』

『へ、恐らく波動砲だろう。だが、プロトタイプだがこっちも持っているぜ。』

ヴォルケンクラッツァーとアラキは、エネルギーを波動砲に溜めていった。

そして同時に「「発射!!」」

どちらも波動砲を発射し、瞬くような光と劈く轟音が辺り一帯を包

んでいき、波動砲と波動砲は、ぶつかった。

と、その瞬間。波動砲同士がぶつかった地点に異変が起きたのだ。突如として空間に穴があき、ありとあらゆる物を吸い込んでいった。『くッ！、波動砲の膨大なエネルギーに空間が耐えられなかったか。あの穴に巻き込まれたらまずい、全艦あの穴から全速で遠ざかれ！』『ダメだ！間に合わない！』『クソッ！』

アラキたちは空間に開いた穴に吸い込まれた。  
そして、海に浮かぶ物は何もなかった。

## キャラクター設定

どうもどうもこんにちは、今回は、この小説に出てくる予定のキャラクターたちを、紹介しようとおもいます。

ちなみにゲストもまねいていきます。

「アラキだ、宜しく。」

さて、余り長話をしているわけにもいかなないので早速紹介を始めましょう。

「ああ、」

まずはこの船からですね。

究極万能ドリル戦艦荒鬼

全長800m

船体底部にバラストタンク二基

機関・核融合炉&超兵器機関

装甲・対80cm砲防御

速力・60ノット

超重力電磁防壁

兵装

波動砲

80cm砲75口径5基15門

ミサイル発射機2

88mm連装バルカン砲

20cm12連装噴進砲

多連装魚雷

クリプトンレーザー

反転後

重力砲

多連装魚雷

ミサイル発射機4

多連装酸素魚雷



4連装ミサイル発射機

80cm砲75口径

「うわゝ我ながらとんでもない性能だな。」

まあ、作者の都合で考えた艦ですしおすし。

設定

ウィルキア近衛艦隊との戦争が始まり半年がたち徐々に戦況が悪化していった

ウィルキア帝国が形勢戻そうとして建造された超兵器。

計画当初は水・陸・空全てに対応できる戦艦を作ろうと言うものだった。

しかし、建造にかかる資材と資金が底をつき、陸上艦にすることは断念された。

艦の至る所にその名残がある。

「ありきたりな設定だな。」

作者の頭ではこれくらいが限界なんです。

まあ、後々変わるかもしれませんが。

「これでもかなり無茶苦茶だな。」

気にしない気にしない。

次は荒鬼の仲間です。

超高速巡洋戦艦「ヴィルベルヴィント」

速度：85ノット

兵装

28cm砲

12.7cm高角砲

20mm機銃

48.3cm酸素魚雷

12cm30連装噴進砲

超巨大潜水艦「ドレッドノート」

耐久力：4000

速度：35.0ノット

兵装

多連装魚雷

誘導魚雷

多目的ミサイルVLS

対艦ミサイルVLS

多連装魚雷

誘導魚雷

(浮上)

耐久力：7000

速度：38.2ノット

兵装

4連装ミサイル発射機

酸素魚雷2

ミサイル発射機

40mmバルカン砲

クラスター爆弾発射機

誘導魚雷

超巨大高速空母「アルウス」

速度：60.0ノット

兵装

40.6cm65口径

40mmバルカン砲

ミサイル発射機

12cm30連装噴進砲

40.6cm65口径

ミサイル発射機2

超巨大航空戦艦「ムスベルヘイム」

速度：36.0ノット

兵装

61.0cm60口径

小型レーザ

多弾頭ミサイルVLS2

βレーザー

拡散プラズマ砲

圧縮プラズマ砲

重力砲

超巨大レーザー戦艦「グロースシュトラール」

速力：35ノット

兵装

光子榴弾砲

多目的ミサイル発射機

拡散荷電粒子砲

荷電粒子砲

100cm砲

巨大戦艦「ナハト・シュトラール」

速力：30ノット

兵装

100・0cm45口径

50・8cm60口径

小型レーザー

超怪力線2

88mm連装バルカン砲

パルスレーザー

「おい作者、こんなに超兵器がいるんだったら敵がつり合わないじゃないか？」

いえ、敵もちゃんと強くするので問題ないです。

「そうか」

また次回会いましょう。

## 第二話 運命の舵輪は廻る

「…長。艦…。艦長！」

誰かに呼ばれているような気がして朦朧としていた意識が覚醒する。

「ここは…どこだ」

「しっかりしてください艦長」「ここは荒鬼の第一艦橋です」「早く起きてください」

声がする方向を見ると二頭身程の妖精のような生物が三体いた。

「何者だ。」

「『妖精です!!』」

「そうか。」

「『反応薄くないですか!!』」

妖精達は荒鬼が自分たちの正体をしつてもあまり反応を示さないことを疑問に思った。

「この世の中何が起こつても不思議じゃない。現に俺が実体化してるしな。」

荒鬼達超兵器の意思は人工知能として存在していたが、今では体が存在しているのだ。

「それはそうとして、ここは何所なんだ。それと君たちは何故この船に?」

「それは私たちがこの船の乗組員だからですよ。ちなみに私が副長です。」「そして私が砲雷長です。」「最後に私が航海長です。」「

「そうか。それで、この船には何人乗っているんだ?」

「総勢で三千人はいますね。」「

荒鬼がそんなに乗っているのかと感心していると

「場所は、緯度経度はあの穴が開いた場所と同じなんです。この辺りの海域をスキャンしたんですがどうにもあの場所と一致しないですよ。超兵器もいませんし。」「

それを聞いた荒鬼の頭に一つの考えが浮かんだ。

「つまりここは、異世界ってことか……………」

ートラック泊地ー

「提督ー！加佐見提督ー！」

「どうした大鯨。」

俺の前にいるのは秘書艦の大鯨だ。

「遠征に出ていた娘達が帰還しましたよ。」

こいつはいろいろ手伝ってくれるしほんとに感謝している。

「本当にいつもありがとな大鯨。」

「いえいえ、当然のことをしているだけです。」

褒められた大鯨はどこか照れくさそうにしていた。

「いや、本当に頑張ってくれているよ大鯨は。」

「フフ、ありがとうございます提督。」

「それでは遠征チームを出迎えるとするか。」

「はい！」

そして俺と大鯨は波止場まで移動した。

「司令官ー！」

波止場に着いてしばらくすると俺を呼ぶ声がした。

「お、帰ってきたか。暁何かあったか。」

「こんなのレディの私にかければなんてことないわ。」

「それにしても結構多いな。」

暁・雷・電・響から運び出されている資材などが異常に多かった。

「それが、深海棲艦と全く遭遇しなかったから取り放題だったのよ

ね。」

深海棲艦遭遇しなかった？あの海域には少なからず深海棲艦がいたはずだが……

「まあ、無事に帰ってきてくれてよかった。さあ、鎮守府に帰ろう。」  
『う、』

「どうした急に頭をおさえて。」

俺の前に頭をおさえている大鯨たちがいた。

「急に頭の中にノイズが……」

「ノイズ？」

そして俺はあたりを見まわした。

すると水平線の向こうから巨大な影を見とめた。

その影はとても巨大でとても速かった……

### 第三話 蒼穹の暴風

この世には二種類の人間がいる。

現実を受け止め、それに対処するもの。

もう一人は現実から目をそらし、現実逃避をする者。

そお、この男のように。

「はあ、海はいいな」ズズズ

そう言いながら青年は緑茶を飲み地平線の方角を見ながら呟く。

「現実逃避しないでくださいよ艦長」

副長は呆れ雑じりに呟く。

「だって異世界だぜ異世界。どんな世界かどんな時代かも分からないんだ。」

「いえ場所は分かっています。」

「で、ここは何所なんだ？」

荒鬼は面倒くさそうに聞く。

「今の現在位置はオーストラリア沖合南西部ですね。」

やっぱりか。荒鬼は心の中でそう思った。

と言うのもあの戦いがあったのは今俺がいる此処なのだ。

そんなことを思っていると。

「レーダに感！未確認艦隊接近！」

「どうしますか？艦長」

どうするか？正直言って状況を把握できていない今は出来るだけ

戦闘は避けたい。

「この辺は確か水深8000メートル程あったな。」

「ええ。」

「よし、深度6000メートルまで降下、バラストタンク注水。急速潜航！」

「急速潜航！」

鋼鉄の城は轟音と共に巨大な水柱を立てて沈み始めた。

ートラック泊地ー

「な、何なんだあれは！」

加佐見提督が見たものは、とてつもない速度で海原を走り回る巨大な艦船だった。

「大鯨。何なんだあいつは！」

「わ、わかりません……………不明艦発砲！」

「な?!」

不明艦から発射された砲弾は放物線を描き鎮守府に飛来した。

「まずいぞ。至急砲台に発砲命令！」

「!、新たな不明艦接近！」

う、嘘だろ。一隻でも手間取っているのに二隻目が来るなんて、壊滅も時間の問題か

「へ、変です！二隻目の不明艦は最初に現れた不明艦の方向に向かって進んでいます。」

「一体何が?!」

荒鬼が潜航してから数分後

「艦長！レーダーに謎のノイズが、この波長から見て超兵器だと思われるます！」

「超兵器か…………艦影を識別できるか？」

「いえ、流星にこの距離では艦影を識別する事は不可能です。」

「そうか。それで、超兵器の現在位置は？」

「超兵器の現在位置は、ここから北東の方向、ちょうどトラック諸島の辺りですね。」

「よし、取り敢えずはトラック諸島に向かう。全速前進！」

「全速前進！」

トラック諸島に現れた超兵器は果たして味方なのだろうか？

この世界に来了た超兵器はあの戦いにいた者達だけなのだろうか？

もしかしたら全ての超兵器がこの世界に飛ばされたのかもしれない。

だとしたらこの先どんな強敵と遭遇するのだろう。

一刻も早く仲間と合流しなければ。



## 第五話 偽りの暴風

「もうすぐトラック諸島です。」

と、副長が告げる。それと同時に

「超兵器反応！艦影識別……この艦影はシュトゥルムヴィントです。」  
くそッ、そんなに上手く味方艦と出会はずもないか。

「艦長！超兵器以外にも多数の反応が確認できます。」

「この辺りは確かトラック泊地があつたな。」

「時代は前の世界と殆ど変わらないのですね、と思います。」

となると、シュトゥルムヴィントを撃破の後そこで補給を要請するのが得策か。

しかしシュトゥルムヴィントと戦うとなると少し厄介だな。

奴の速度は1 8 0ノット。対してこちらは60ノット。核融合炉を起動しても90ノット。

明らかに渡合える速度じゃない。

「どうしますか、正攻法じゃ相手しづらいですよ。」

確かに副長の有通りだが、それは正攻法での話だ。  
真っ向から戦わなければどうとゆう事もない。

「両舷前進強速！総員、第一種戦闘配置！」

「艦長やる気ですか！」

「ああ、主砲による超長距離射撃を行う。」

「もしかしてあの機能をつかんですか？」

「そうだ」

あの機能とは荒鬼の秘密の一つで80cm砲に組み込まれている。  
「俺たちもCIC艦橋に下りよう。」

「敵艦主び砲射程圈内に入りました。」

「よし、主砲発射準備。電力伝達圧力60」

「主砲発射準備完了！」

「主砲一斉射！」

荒鬼の声の後、主砲から響く轟音が艦の奥底にあるCIC艦橋にまで少なからず聞こえていた。

轟音と爆炎を放出し主砲から発射された砲弾は火薬と電気の間を受けて音速の数倍の速度とんでいった。

荒鬼の主砲は特殊な物で大口徑の主砲にレールガンを組み込みさらに火薬の力で加速させ高威力の砲弾を相手に叩き込むという無茶苦茶な性能で、まさに超兵器技術の賜物と言えるだろう。

射程は主砲に流す電気の圧力によって変わるため実質無限であるが、

100以上の圧力を流すと電気を流す装置がオーバヒートしてしまう恐れがあるので非常に危険という欠点がある。

しかし圧力100以下でも高い威力出せることから余り欠点とは言えない。

荒鬼から発射された砲弾は回避行動をとる間もなくシュトゥルムヴィントへと命中した。

その衝撃でシュトゥルムヴィントの艦橋は吹き飛び船体に無数の穴を開け海水がどつと流れ込んだ。

シュトゥルムヴィントはその自慢の速さを生かす間も無くその巨大な船体を海に沈めていった。

「敵艦轟沈！」

『よっしゃー！』

艦の色々な場所から無線を通じて歓喜の叫びが木霊する中荒鬼だけは苦笑いを浮かべた。

「どうしたんですか艦長？」

そんな荒鬼の様子に気づいたのか副長が声をかけてきた。

「副長。何か可笑しいと思わないか？」

「可笑しい事と言えば超兵器が余りにも弱すぎたという事ぐらいですかね？」

「それだよ副長。余りにもシュトゥルムヴァイントが弱すぎたんだ。」

確かに荒鬼の砲兵器は強いがいくら装甲が弱いシュトゥルムヴァイントでも一撃で沈むはずもない。

何より可笑しいのは荒鬼の砲撃を回避しなかった事だ。

荒鬼の砲弾は音速よりも速い速度で飛んで来るため普通の艦では無理だがシュトゥルムヴァイントの180ノットという常識外れの速度を生かせば被弾は防げなくとも前段命中という悲惨な状態は避けられただろう。

「まるでシュトゥルムヴァイントの劣化版ですね？」

「ああ、まだあの船には謎がありそうだ。」

荒鬼は超兵器シュトゥルムヴァイントを倒した後、トラック泊地に向かった。